Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

162

幼稚園の子育て支援としてのカウンセリング活動について
—1—

○濱名　浩　　辻河　優
（立花愛の園幼稚園）　（立花愛の園幼稚園キンダーカウンセラー）

Ⅰ　研究の目的

筆者らは、2001年度から私立幼稚園で子育て支援としてのキンダーカウンセラー活動により、特に心理的支援を目指した活動を行っている。キンダーカウンセラーとは、菅野（2000）において提唱されたものであり、簡単に言えばスクールカウンセラーの幼稚園版であるが、スクールカウンセラーとの異動が問題になる。

また、現時点でキンダーカウンセラー活動は、スクールカウンセラーのような全国レベルでの組織だった動きはなく、ある地域で発達巡回相談として行われていたりするのみで、その実践例の報告は少ない。

そのため、本報告では、1と2を通して、キンダーカウンセラー活動を実施している幼稚園と、キンダーカウンセラーとして活動しているカウンセラー双方からの報告を行いたい。

Ⅱ　方法

（1）活動の場

幼稚園とは、いうまでもなく家庭教育を補完し、幼児教育を行う場である。多くの幼児は、幼稚園で初めての集団生活を経験する。しかし、幼稚園を取り巻く環境は急速に変化している。特に、過保護や過干渉、育児不安など、保護者と子どもの関係構築に関する問題が幼稚園の保育においても大きな課題となっている。

幼稚園が、保護者の悩みや不安等に相談・対応し、家庭教育を支援しつつ、保育のなかで幼児の健全な発達を保障するという新たな役割が求められている。

公立幼稚園や保育のなかには、教育委員会や地域医療と連携のなかでの制度が確立されているところもあるが、私立幼稚園の場合、カウンセラー等の専門家による相談体制をとる場合、その経営母体や園長の判断で実施するしかない。資金面での公的なバックアップは現在のところ得られないところが圧倒的である。

また、私立幼稚園の特徴として、公立の幼稚園と比べて、若い職員が多いことも挙げられ、園長や主任教諭が相談に応じることが多いと推測される。

活動を行ってきたA園は、関西のある中堅商・工業都市に位置し、大工場と中小企業の下請け会社も多く、近年の不況で経済的に困窮している住民も増加している。筆者らが活動を開始するのと前後して、この地区で虐待死亡事件が起こった。

A園は、年長7組、年中7組、年少4組、在園児は430名の大規模園である。職員は、園長、教頭以下28名で、経験年数による構成は比較的バランスのとれたものとなっている。園の保育理念から、子どもと大人の関係性について、子どもの心や育ちについて、造詣が深く、キンダーカウンセリング活動に関しても理解がある。園長以下、職員は、キンダーカウンセラー活動に協力している。

（2）活動のねらい

本来、保護者の悩みや育児不安については、担任教諭や教頭、園長が身近に行うものであるとされてきた。しかし昨今、保護者が抱えている悩みは、子育てやしつけと、保護者自身が抱えている問題が多くなった。

例えば、夫婦間の問題などは、トラブルになると幼児にも影響が及ぶが、夫婦間の問題を未婚の教諭や、男性の園長に相談するには、かなり心理的に抵抗があるのではないか。また、いわゆる「先生」に対して自分の子どもの悩みをうち明けるのに抵抗感がある保護者もいるのでははないか。

そこで、全くの第3者であるカウンセラーに、いろいろなしがらみを気にせず、気軽に相談できる相手や、体制があれば、抱えている問題の内容にかかわらず相談でき、結果として、幼児と保護者との良い関係へ発展することを願い、キンダーカウンセリングを始めた。

また、園内でとりおこなう事で、カウンセラーが幼児を直接見ることができ、また担任保育者や園長とも話し合えることができる。それは保護者と幼児だけでなく、保育者にも幼児理解と保育方針を協議できることができ、大変有効ではないか。

Ⅲ　結果　—活動の概要—

活動内容は、大別すると3つに分けられる。1．保護者に対する支援と、2．保育者に対する支援、3．子どもへの直接的な関わりを通した支援である。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

1．保護者に対する支援としては、保護者対象に、個別カウンセリングや講演会活動を行っている。

a　個別カウンセリング

A園では、辻河が幼稚園に非常勤で勤務し、定期的に保護者に対するカウンセリング活動を行っている。頻度は月に二回である。内容は、カウンセリングを受けに来た保護者から了承を得た場合を除き、原則として秘密を守っている。そのため、職員に保護者の相談内容がすべてそのまま伝わってしまうことはない。

b　講演会

年に一回か二回、勤務日の午前中2時間前後を予定して、講演会を行っている。テーマは、その時期にあったものを園と協議して決定しているが、これまでには、新入園時や卒園・進級時における保護者の不安を考えて話をすることが多かった。

2．保育者に対する支援としては、3．の子どもへの直接的な関わりとも連動しているのだが、保育室に入っての参加観察がある。園生活上で、保育者にとって気にかかっている子どもについて、園児らが帰園した後、主に担任や時には主任、園長を交えて家庭の状況なども加味しながら、話し合いを持つ。

3．子どもへの直接的な関わりについては、事前に気になると情報を得た園児のいるクラスを中心に、カウンセラーが参加観察している。主に、友人関係や保育者との関係だけでなく、多動性や落ち着きのなさ、器用さ、運動能力など発達的なチェックもできる範囲で行っている。

Ⅳ　考察　―子育て支援としてのキンダーカウンセラー活動―

Ⅲで述べた3つの柱は、それぞれ子育て支援という役割を担っている。

特に、幼稚園内で行うキンダーカウンセラー活動には、次のような意味があると思われる。

まずは、園児達を対象とすることで、他の年代よりもさらに発達的視点が重要であるということである。

次に、園児にとっても、該当する保護者にとっても近年増加していると言われている虐待について、うち明けられる場所になりやすい点が挙げられる。園内での守秘義務を、キンダーカウンセラーと保護者間だけではなく、園全体の守秘義務と考えていく心構えが、職員全体に望まれる。そのためにも、職員とキンダーカウンセラーの連携も密にしておく必要があるだろう。

いずれの問題にしても、園内のキンダーカウンセラー活動は、それまでの園と保護者の関係が良好である場合には、保護者にとって、他の相談機関よりも敷居がかなり低くなっている印象がある。

では、保育者にとっては、どうであろうか。先に、菅野・辻河（2002）が述べているように、キンダーカウンセラーが保育へ直接参加していくことで、カウンセラーは、専門性を生かした知識の伝達だけでなく、様々な問題を目の前にして困惑している保育者に対して、一緒に考え、整理していくことで事態が好転していくことがある。保育者にとっても、一緒に協力していけることがプラスの要因になっているのではないか。特に私立幼稚園の保育者は経験年数が短いことが多いので、園児の問題を自分の未熟さに起因させていることが多く、それがストレスになり、当該の園児と関わることが難しくなっていることがあると思われる。それらのことを整理していく中で、子どもへの関わりが変化し、そのことで子ども自身が変化していくことも生まれるのではなかろうか。

Ⅴ　まとめ

菅野・辻河（2002）が述べているとおり、子育て支援とは、いわゆる保護者・保育者を対象とした“子育て”支援と、子ども自身の発達や心理的問題を念頭においた“子育ち”支援とがあり、両者が必要になると思われる。それらのバランスのとれた支援活動をA園の中でどのように行うのが適切であるのか、その試みについて報告した。

また、幼稚園で実施される子育て支援とは、いうまでもなく、キンダーカウンセラー活動のような心理的支援のみならず、親子学級や預かり保育（延長保育）、夏期保育など保護者への時間的、情報提供的支援をはじめとするこれまで幼稚園で行われてきたさまざまな活動も同様に必要とされているだろう。今後、それらの中で、このキンダーカウンセラー活動がどのように位置づけられ、展開されるのが望ましいか、引き続き検討していきたい。

引用文献

菅野信夫　2000　子育て支援―幼稚園での活動を中心に―　日本臨床心理士会　第一回子育て支援研修会　日本臨床心理士会子育て支援専門委員会（編）p22-24

菅野信夫　辻河　優　2002　子育て支援　保育と仲間づくり研究会　満3歳児就園　保育者、保護者のための保育実践と子育て支援　小学館　p107-117

NII-Electronic Library Service